

## 書類の電子化

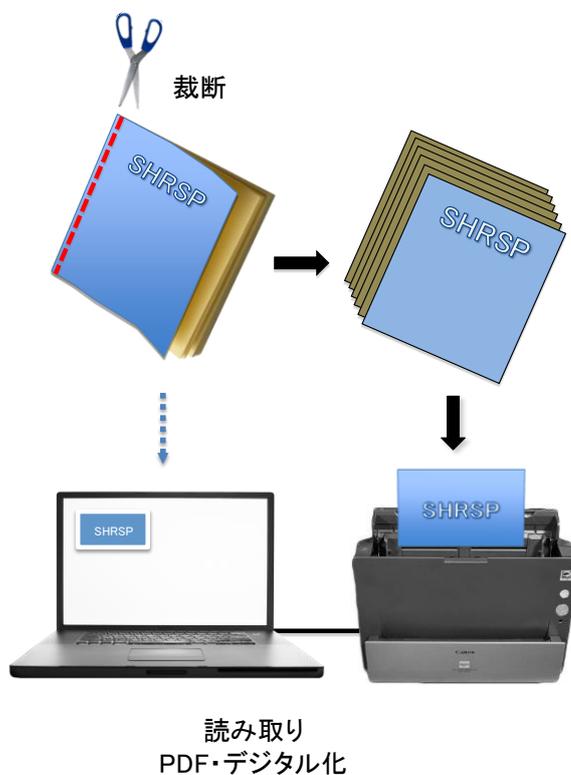
前就実大学薬学部教授  
奈良安雄

趣味の一つは、書店内を本のタイトルを見ながら、ぶらぶら歩いて見て回り、その時興味をひかれた本を買うことである。買った本を全て読んでいるわけではなく、しばらくすると興味を失ってそのままになっている本が相当な冊数になって溜まっているが、書店に行くについついまた本を買ってしまう。

最近では書店の大型店舗化が進み、近所に気軽に立ち寄れる小さな書店が少なくなってきた。大型店舗では多数の種類の本を揃えており、コンピュータによる在庫の有無や配置場所の検索も可能であるので、書名や著者名が分かっている本を探すには非常に便利である。しかし、ぶらぶら歩いて見て回る場合は、その書店の本の配置を把握していないと、興味のある棚にたどり着くのに苦労することがある。

私は3月に就実大学薬学部を定年退職し、それを期に岡山から出身地の神戸に転居した。今まで、大学院時代の福岡を振り出しに、京都、島根、京都、下関、岡山と転居してきた。転居のたびに頭を悩ますのは溜め込んだ本のことである。これまでは、そのまま詰めて、大学の研究室や自宅に運んでいた。しかし、今回は収容場所が限られるため、その整理の一つとして、本の電子化(自炊)を試みた。

その方法は本の綴じ代のところから少し内側を裁断機で切断し、本をバラバラにする。バラバラになったページをスキャナーで読み取り、PDFの形式でコンピュータに保存する。スキャナーで取り込んだままではアナログ情報なので、最初から読んでいくのには問題



## ○目次

巻頭言	P1
理事会報告	P3
お知らせ	P6

ないが、目次やキーワードから目的のページに行くには不便である。キーワード検索を出来るようにするには、デジタル化する必要がある。以前は、デジタル化に時間が掛かり、また、認識できない文字は無理に変換していたので、訳の分からない文字の羅列が散見され、それを訂正するのに非常な手間がかかった。しかし、最近の文字認識ソフトはよく出来ていて、短時間のうちにデジタル化してくれる。勿論すべての文字を認識してデジタル化しているわけではなく、認識できない文字は、アナログのまま残っているようである。文字の認識率は向上しているようで、試しに単行本になっている国際シンポジウムのプロシーディング(約400ページ)を自炊して、キーワード検索したところ、十分に使用に耐えるものであった。

文書のデジタル化は学術論文の分野で著しく、十年前にはデジタル化されていたのはアブストラクト部分のみで、全文を閲覧するには紙媒体を通じてしか出来なかった。しかし、今日では、殆どの論文の全文がデジタル化されており、瞬時にコンピュータ上で閲覧できるようになっている。また、雑誌によっては数十年前の論文についても内容をデジタル化しているので、図書館の奥深くにしまわれている雑誌を探し出すまでもなく簡単に閲覧することが出来る。また、論文中の引用文献についても、簡単に閲覧できる形式の雑誌もある。情報収集のため論文をコピーしてためていた頃とは隔世の感があるが、あまりにも多くの情報が簡単に手に入るため、それを十分に使いこなすには新たなシステムが必要である。

紙媒体になれた世代にとっては、コンピュータの画面上で長い文章を読むのは骨の折れることである。電子書籍を読むためのタブレット端末が種々発売されているので、試してみたところ、文字の拡大機能などが付いていて、小さい文字が見にくくなっている者にとっては重宝である。タブレット端末は大量の情報を保存して持ち歩くには便利であるが、長時間の読書にはまだ不向きな点がある。

その理由は、読書による目の疲れの違いである。紙媒体の場合は、紙から反射した間接光が目に入ってくるのに対し、タブレット端末では光源からの光が直接目に入ってくるため疲れやすくなる。

この分野の進歩は日進月歩であるので、紙媒体に近いタブレット端末が開発されることを期待する。



色鮮やかなオウム(オーストラリア)



グレートオーシャンロードの風景  
(オーストラリア)